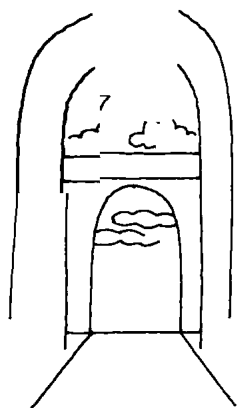


プラトンは
赤いガウンが
好き

小峰元



プラトンは
赤いガウンが
好き



著者紹介

大正10年3月神戸に生まれる。昭和48年、「アルキメデスは手を汚さない」にて江戸川乱歩賞を受賞。著書は他に「ピタゴラス豆畑に死す」「ソクラテス最期の弁明」「パスカルの鼻は長かった」「ディオゲネスは午前三時に笑う」(写真鑑賞者)

プラトンは赤いガウンがお好き 定価 六九〇円

第1刷 昭和52年1月20日発行・第6刷 昭和53年3月17日発行

著者 小峰 元 (こみね・はじめ)

発行所 株式会社 講談社・発行者 野間省一

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話東京(03)945-1111(大代表) 振替東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社・製本所 株式会社黒岩大光堂

© 1977 HAJIME KOMINE Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

この作品は「高3コース」昭和50年4月号・昭和51年3月号に連載されたものに加筆訂正したものです。





プラトンは赤いガウンが好き



目次

食欲と恋愛と「矢恋」と……………	5
若者と原人と哲学者と……………	22
毒とチヨコと布ぎれと……………	39
死亡と蘇生と求愛と……………	57
テストと忍法と陰の声と……………	73
お化けとお酒と美少年と……………	89





スターと受験生とお好焼と.....	105
包み紙と杯とカップと.....	123
仮病と疑似餌と疑似付人と.....	137
悪計と密計と奇計と.....	149
学堂と饗宴と逍遙と.....	162
物理学と発声学と推理学と.....	177
仕掛人と反逆者と解明者と.....	189



葵
和
田
誠

食欲と恋愛と「矢恋」と

Ⅰ

「私の今の心境を、一口でいうならば、よ」

と、ヤーレンが、くちびるについたアニコを長い舌でペロリとなめていった。

「泣きながらニコニコしているという複雑かつ深刻な状態なんだ」

興奮すると、男の子のような口をきくのがヤーレンの悪いくせなの。私たちだけのときなら、それもいい。でも、衆人環視の中で、大声でやられちゃ、女番長と副番長が、なぐり込みの打合わせをしているように聞こえやしないかしら。

「つまり、うれしいの、それとも悲しいの？」

複雑な心境を、難解な表現で説明されたのじゃ、さっぱり理解できないから、私は、しとやかに聞き返す。だって私は、たった今、大阪府立堂島^{どうじま}高校の三年生になったばかりの、花も恥じらう十七歳のおとめ。はばかりながら良家の嬢^{みいし}ハンである。スケバンと見られては、ご先祖様に申

し訳が立たない。

始業式のあと、組分け、担任の発表と、お決りの行事が終わるのを待ちかねて、私たちのたまり場、喫茶「アカデミア」でアンミツを食べながらの会話である。少しは周囲に気を配ってもらわなくちゃ、淑女のたしなみってものがあるじゃないの。

「だから、簡単にいえば」

とヤーレンは、からになったアンミツのカップを残り惜しそうにながめながら、

「アンミツを注文したのに、ミツマメの上に、カレーをかけて持ってこられたって感じなのよ」
ちっとも、簡単じゃないわ。よけいに、わからなくなってしまう。

「問題は、さっきの組分けなのよ」

「不満なの？ 私と同じ一組になったのが」

「バトラはいいの。でもねえ……」

申し遅れたが、バトラとは私のことである。バンドとゴジラのハーフじゃない。フルネームは、クレオバトラ。といったらカンといい読者諸君は、さては絶世の美女なんだと思われるだろうが、ご明察。どう控え目に評価しても、ヤーレンを自乗したくらいの美人である、と私は信じている。だけど、ヤーレンにいわせると、

「確かにクレオバトラに似ているわよ、グラマラスな下半身だけはね。でも、おメンのほうは、失礼ながら鼻が低くて……」

で、クレオぬきのバトラと命名されたのだけれど、全く失礼ね。

ついでにヤーレンの紹介もおこう。本名なんか、どうだっていい。ヤーレンの由来なのだが、彼女、高1のとき、人並みに初恋をして、人並みに失恋した。黙っていればいいものを、そ

のいきさつをメンメンと作文に書いたものだから、先生は驚いた。

「何じゃね、この、ヤーレン」という題は。ソーラン、ソーランを略したのかね」

「あら失礼しちゃうわね。ちゃんとシツレンと書いてあるでしょ」

憤然と薄いまゆげをさか立てたが、

「失礼の失も失恋の失も、ノの字が上へ突き抜けなくちゃあね。キミのは失恋と書いてある」

ウヒウヒウヒと笑われたものだから、恥ずかしさと腹立たしきで血が頭に上って、失恋の悲しみは、どこかへ飛んじやったそうだけれど、おかげで、ヤーレンの名は校内のすみずみまでとどろき渡ったってわけ。

「バトラとは、また机を並べられるし、ドロンの同じ一組になったのだから、その点はごきげんなのよ。でも」

ドロン。フルネームはドロン・ドロン。性別は♂。断わっておくけれど、アラン・ドロンの誤植ではない。生徒集会や掃除だの校庭の草むしりだのというときには、いつの間にかやらドロン、ドロンと姿を消してしまう忍者まがいの要領ボーイである。顔もスタイルも、アラン・ドロンとはダンチで、まあ、ともに人類であるというところくらいかね、相似点は。

「そんなことないわ。彼の目って、虚無的でステキ」

とヤーレンはいうけれど、男の子って、深夜テレビを見すぎると、ああいう目つきになるのよ、買いかぶっちゃダメ。でもヤーレンが、やつきになって反論するところを見ると、何十回目かの恋を、おっ始めるつもりかしら。どっちみち、遠からず、失恋、するだろうから、どうってことないけれど。

「でも、何よ」

「だからさ、ミツマメの調合は、よかったのよ。カンテンもマメもサクランボも、ちゃんとはいっているし、蜜の甘さも上々。ところが、上にかけたものが悪かったわ。アンコの代わりにカレーときちゃった」

わかる、わかる、と私は大きくうなずいた。以心伝心、ツウといえばカア、の間柄なんだ、私とヤーレンは。

「……でしよう？」

「……だわよねえ」

と、こういう会話で意思が通うようになくちや、親友とは呼べないわよね。

「まさか担任が」

「ゲンジンとはねえ」

ゲンジン。正しくは原人。歴史の先生である。世界史の教科書の第一ページを開いていただけは、ネーミングの由来は一目瞭然。第一章第一節は「人類の誕生」とくるのが常識で、そこには、北京原人（シナントロプス・ペキネンシス）の復原像がかいてあるのが、これまた常識。伝統に輝くわが堂島高校の第一期生が、その画像を見て、

「あら、これは、ひょっとしたら先生のモンタージュ写真では？」

と全員思わず心で叫んだその瞬間から、彼の尊称はゲンジンと決まって、今に受け継がれているわけ。

男は顔でなくて心だそうだけれど、モノには程度ってものがある。今は二十世紀なのだから、それ相應の顔をしてもらわなくちやね。それとも、整形外科医も、サジじゃなくて、メスを投げたのかしら。

その点、私たち女性は、顔も心も、エコヒキなくみがく。化粧品メーカーの調査だと、平均的日本女性は、十六・七歳でマニキュア、十七・六歳で口紅、十七・八歳でまゆずみ、十八・〇歳でアイシャドーを初めて使うのだって。だったら、私は、今や、より美しくなるときにさしかっているわけである。クラスのおとも、お覚悟召され。

もつとも、ヤーレンなどは、この春休みに、いとこの結婚式に参列することになって、十余種の化粧品をたっぷり使い、三時間かけて念入りにお化粧して出てきたら、浪人の兄きに、

「何や、三時間前と、ちつとも変わつたらんやないか」

といわれて、悔し涙にくれたそうだけれども、まあ、土台が悪ければ、仕方がないわね。砂上の楼閣ろうかくっていうじゃないの。

それは、さておき、

「しかもよ」

とヤーレンは二十一世紀になったら、もてはやされるかもしれない超近代的な顔をしかめて、

「私たちの演劇クラブの顧問に就任するっていうから笑わせるじゃない」

「ゲンジンに現代演劇がわかるのかしら」

「バトラにエジプトの象形文字が読めて？」

「読めるわけないでしょ」

「だったらゲンジンに近代劇のわかる理屈がないわよ」

シイツと私は、くちびるに指を当てた。ドアを押して、ゲンジンが姿を現わしたからである。ゲンジンがコーヒーを飲むなんて、時代錯誤時代錯誤もいいところだわ。

ゲンジンのことだから、旧人類（ホモ・ネアンデルタールンシス）でもお供に連れてくるのかしらと思ったら、続いてはいって来たのは、テンテルとノッベだった。

世界史の教科書には「ネアンデルタール人は、すぐれた狩猟の技術を持っていた」と書いてあったけれど、本当だわね。テンテルは目ざとく私たちを見つけて、

「あらあらあら、まあ」

といった。答えてヤーレンが、

「まあまあまあ、あら」

と手を振って、これで、あいさつはおしまい。ゲンジンたちは当然のような顔で、私たちのテーブルに割り込んできた。

「偶然とはいいいながら」

とゲンジンは私たちを見回して、

「わが演劇クラブの主役クラスが勢ぞろいしたってことだね」

主役クラスもなにも、三年生のクラブ員は、ここにいる四人と、ドロンを合わせての五人だけ。二年生は十五人くらいいるけれど、大根ぞろいで数のうちにはいない。新一年生は、これから私たちが馬力をかけて募集しなくちゃならない。ことしは、いい子がいるかしら。

「だったら、ここで本年度初のクラブ集会を開きましようよ。新任の顧問先生の施政方針を伺いたいわ」

と、ヤーレンが、いらざるオベッカ。さっきまで、ゲンジンの非芸術性を論じていたくせに、

調子がいいんだから、全く。

そりゃ、いいね、とゲンジンが早速、乗ってきて、

「クラブの運営について、諸君の希望があれば、聞いておこうかね。及ばずながら、力になるよ」

と、そっくり返った。

「提案があるのですけれど」

と、私はヤーレンのひざを指でつついて合図しながら、

「これは正式のクラブ集会ですから」

「そうとも、そうとも」

「ここの支払いはクラブ運営費から支出すべきだと思います」

そら、ここよ、と、グイとヤーレンのひざをつねったら、

「賛成、異議なし！」

と、飛び上がった。何も飛び上がることはないじゃないの。少しくらい痛くたって、アンミツがタダになるかどうかの瀬戸ぎわだもの、がまんしなくっちゃ。

テンテルもノツベも、ケタケタと笑いながら賛成したものだから、ゲンジンは、渋い顔で、うなずいた。すかさず、ヤーレンは晴れやかな顔で注文した。

「じゃ、アンミツを、もう一つ、いただこうかしら」

「深刻に悩んでいたわりには、食べるわねえ」

「悩んでいるのはハートよ。胃腸には異状はないの」

そうでしょうとも。お弱いのは上半身のハートとオツム。下半身に属する胃とオシリの大きさ

はクラス一。ワンバクでもいい、たくましく育ってほしい、という親の願いが、そのままになったのが、現在のヤーレンなんだから。

テンテルとノッペは……おっと忘れていたわ、この二人も紹介しておかなくっちゃ。

テンテル。♀。三年二組。容貌3、知能2、体育5、栄養バツグン、演技力1。賞罰なし。

知能2を証明する事例、次のとおり。

テンテル「ねえ、このテンテルダイジンって、何者なの？」

ヤーレン「バカねえ。これはアマテラオオカミと読むのよ」

よって、テンテルは2、ヤーレンは3。私はちゃんとアマテラスオオミカミと読めるから5。公正な採点でしょ。

ノッペ。三年二組の美少年ナンバー1。ただし、自薦。もし公選で投票したら、支持率はよくても二十％。ノッペリしているからノッペ。だいたい男の子のアダ名なんて、この程度のもが多い。男って単細胞だから。

ドロロンもノッペも、そうだけれど、どうして堂島高校には、これという男の子がいないのかしら。

「だから、わが校は勉学に向いているのよ。ステキな男の子がチラチラしたら、気が散って勉強できないでしょ」

とヤーレンはいうのだけれど、この際、学区制を改正して、わが校にも鑑賞に堪えるのを、二、三人配ってほしいわね。教育委員はジイサマ、バアサマばかりだから、そうしたキメの細かい配慮に欠けるのじゃない？

「でも、その点、わが校の男性は、お気の毒ね。私たち美女がノシ歩くものだから……」

男子の国立大合格率が、大阪では中の下というのは、私の責任かしら。だったら、ことしの夏は、ウスモノを着るのを遠慮してあげてもいいのよ。

それにしても、去年の秋の文化祭で合同公演した曾根崎そねざき高校の演劇クラブには、なかなかの人材がいたっけ。さすが曾根崎中ゆかりの地だけあって、徳兵衛さんにあやかってヤサ男が多いらしい。

「先生、春の新入生歓迎公演のことですけれど」

「おう、外題げだいが決まったかね」

歌舞伎じゃないのよ、外題だなんて、古い感覚ね。今に「与話情浮名横櫛よわなさけうきなよこくし」死んだはずだよオトミさんをやれといいだす恐れがある。

「曾根崎高校と合同公演なんて、どうかしら」

「あら、名企画。いっちょよう、やったるか」

とヤーレンがバチンと指を鳴らした。男ことばが出たところを見ると、乗り気も乗り気。

「こちらはアクトレスがツブぞろいだし、あちらはアクターがイカスわ。有無あい通じて空前の大顔合せ。こいつは春からエンギがいいわい！」

いやな顔をしたのはノッペとゲンジンで、テンテルも、

「他流試合で腕をみがかなくちゃあね」

と、栄養のゆき届いた大根足を、四股を踏むようにドシンドシンと鳴らして、やる気十分。三対二で、私の提案が可決されようとした寸前、ゲンジンが異なことを口走った。

「私の脚本を上演するというのだったら、考慮してもいいがね」

「あらあら」

「先生が？」

「脚本を？」

「書くんですって？」

と四人は顔を見合わせて、あんぐりと口を開いた。ヤーレンなどは驚きのあまり、サクランボのタネを飲み込んでしまったくらい。

「私が脚本を書いちゃ、いけないのかい」

「い、わるいの問題じゃなくて、可能か、不可能かの問題だと思うけれど、
「とんでもございませんわ。ぜひ拝見したいわ。ステキでしょうね、とても」

と心を鬼にして（使い方が違ったかしら。こんな場合は、心を仏にして、というべきかな）心にもないお土砂どしやをかけたなら、

「いっちゃなんだが、脚本には自信があるのさ。今も、頼まれて、テレビに一本書いているんだがね」

人は、みかけによらず、世の中に不可思議のタネは尽きないって本当ね。ゲンジンにテレビ・ドラマが書けるくらいなら、ヒマラヤの頂上で雪男がツチノコを飼っていたって、私は、ちっとも驚かないでしょうね。

「近いうちにビデオどりする予定でね、目下、鋭意、執筆中さ。まあ、きみたちに演技力があれば、出演してもらってもいいと思ってるくらいでね」

とたんに、テンテルの目が、ギンギンキラキラと、名前どおりに照り輝いて、
「センセ。私、脱いだっていいのよ」

堂島高校生ともあろうものが、ああ、あさましい。それが身長百五十、容貌3のおとめが正気